みいら採り猟奇譚

河野多

みいら採り猟奇譚

河野多恵子

新潮社

みいら採り猟奇譚

●著者　河野多恵子　●発行者　佐藤亮一
●発行所　株式会社新潮社　〒162 東京都新宿区矢来町71 振替 東京4-808 電話 業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411 ●印刷所 二光印刷株式会社 ●製本所 加藤製本株式会社
●1990年11月25日印刷　●1990年11月30日発行
価格は函に表示してあります。

© Taëko Kôno 1990, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600650-2　C0393

目次

第一章……5
第二章……147
第三章……276

主要登場人物

尾高比奈子＝数え年十九歳で、尾高正隆に嫁す。相良家のひとり娘。

尾高　正隆＝尾高家の五男一女の次男。数え年三十八歳で、比奈子と結婚する。内科医。

相良　祐三＝相良外科病院の院長。婿養子。比奈子の父。

民子＝祐三の妻。相良家の家つき娘。比奈子の亡母。

邦夫＝相良家の養子で、比奈子との結婚が想定されていた外科医。故人。

俊行＝医学生。相良家の養子となる。

尾高道太郎＝内科医。正隆の父。

ハナ＝道太郎の妻。ドイツ人との混血婦人。正隆の母。

恒一郎＝尾高家の長男。大学助教授。

琴子＝恒一郎の妻。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

みいら採り猟奇譚

第一章

昭和十六年――一九四一年――新緑の季節、比奈子は尾高正隆と結婚した。彼女の思いもしなかった、変った結婚生活の始まりだった。

比奈子は先ごろ高等女学校を出たばかりの若さだった。いずれ自分の良人になるのだろうと思っていた人を不意に喪うというような出来事に出会ってはいたが、正隆との場合がとにかく最初の経験なのであった。

それなのに、彼女は新婚生活もまだ早いうちから、自分たちの状態は普通の人たちとは大分ちがうのではないかと次第に思うようになる。ただ、世にはこういう結婚生活もあるのかもしれないと思う気持が彼女のどこかにあった。

尾高正隆の一家は、その姓を旧くから知られている医学者・医家一族のうちのひとつだった。一族には、男子は全員みな医学出という一家も珍しくない。正隆たちの一家は、男子も全員とまではゆかなくて、五男一女のきょうだいのうちの二人は他の方面に進んだ。が、長男は大学の医学部助教授、父の尾高道太郎と二男の正隆は共に内科医でそれぞれに開業し、末の弟も医学部に

在学している。

比奈子の生まれた相良家も医家であった。尾高一家とはちがって、もともと親戚は少く、医家もほかにはなかったが、亡祖父がやはり内科の開業医であった。尾高家とは昔から家も近く、旧い知り合いだった。比奈子が通った地元の小学校は、正隆たちが通ったのと同じ小学校であったが、彼等の父や比奈子の亡母も又そこで学んでいる。亡母の民子は——娘の比奈子もそうなのだが、ひとり子なのであった。

比奈子の父の祐三は早くからの取りきめで迎えられた、亡母の婿養子である。内科に進む約束だったのに、途中から外科を望み、主張を通して外科医になった。彼はなかなかの外科医の腕前と才覚をもっていた。義父の支援で、その隣りでささやかに開業すると、忽ち患者をふやし、やがてほんの二丁しか離れていないところに今度は自力で相良外科病院を建てる。それをまた大きくする。彼は義父が内科の開業医であるのに、内科医——ことに開業内科医を軽蔑する言葉をよく口にした。そればかりでなく、義父母の趣味事、その人たちの旧い友人知人のこと、みな軽蔑し、排撃気味であったようだ。時たま、比奈子に彼女の知らない、あるいはうろ覚えでしかない時代の家の話を聞かせる時の彼の口ぶりだけからしても、そういう気配が感じられる。

ただ、祐三は尾高一家のこととなると、全く彼らしくないのだった。内科の開業医であり、義父母の遺した知り合いでもあるし、とうに疎遠になっていてもよいくらいなのに、義父母と彼との中程の年代にあたる尾高先生夫妻に対してなど、敬愛していると言ってもよい。ドイツ人との混血の奥さんのことにしても、あのハナさんは女子供の部類じゃあないと言って褒める。それは今に始まったことではなかった。日本で年々高まっているドイツの人気とは何の関係もないのだ。

ドイツ人とそしてヒットラー総統のことが新聞やラジオやニュース映画に急速に出はじめたの

は、比奈子が女学生になった昭和十一年、ベルリン・オリンピックの頃からだった。そのオリンピックの外国での人気はどうだったか、彼女はもちろん知らない。前回のオリンピックの時は、どこで開催されたのか、それさえも忘れている。比較のしようはないのだが、ベルリン・オリンピックが日本で非常に人気があったのはまちがいない。ドイツの選手たちは強くて、人気があった。彼等の勝利と祭典の成功を目指すヒットラーの祖国ドイツへの愛と信念とがまた、それ以上に人気があった。

そういう祭典に参加している日本選手たちのことが誇りと熱い期待をそそり立て、ベルリン・オリンピックの人気は途方もなく昂進した。四年後の次のオリンピック開催地が日本の東京と決まっていることも、ベルリン・オリンピックへの関心を刺戟した。

しかし、そのあと程なく、大陸で日本と支那との間に軍事衝突が起きた。軍隊がどんどん送り込まれるようになった。家族なり、親戚なり、知人なりのうちに、出征将兵をひとりも持たない家は、急速に減っていった。比奈子は同級生たちと下校の途中で、英霊の葬列に出会ったこともある。皆すぐさま口を緘んで静止した。白手袋の軍人の捧げている白布に四角く包まれた英霊が目の前に来かかるのを待って、真摯に頭を下げた。

支那との衝突がいつ本当の戦争になったのか分らないうちに、世の中は戦時下になってしまっていたのであった。ヨーロッパでも、戦乱が起こり、続いているらしかった。東京オリンピックが中止と決まったのは、いつのことなのか、比奈子は知らない。が、その数年間に、ドイツとヒットラー総統の名は、熱い敬意と親愛感をもって掲げられることが更にふえた。比奈子が何故そうなってゆくのか考えてもみないまま、教室でもドイツとヒットラー総統の名に出会うのが珍しいことではなくなった。

家政の時間に、ドイツ婦人がいかに科学的かということを教わった。たとえば、ドイツも日本と同じく軍需産業用のエネルギーを大量に必要としているが、彼女たちがそのために家庭での熱量消費をいかに節約しているか、ドイツの冬はきびしいのに、常に寒暖計を見て最少限度の室温に抑えている。皆さんのお宅では、お風呂を沸かしすぎて、どんどんうめるというようなことをしてはいませんか。ドイツ婦人を見習いましょう、温度を計る習慣をつけましょうと、温水計のガラス棒をかざして言われた。その後、体操の先生が「エネルギーの節約に寒暖計を見る。——科学的というのは、そういうことじゃあないのだ」と、授業の小憩のときに言われた。ドイツ婦人がいかに科学的かという話を、家政の先生と同じ新聞記事か何かでお読みになったということもあり得る、などとは誰ひとり思わなかったにちがいない。防空演習や救護訓練の際、母子くらい年のちがう両先生の間で、どうも指導の意見がもつれる気配があったから……。皆、一斉に固唾を飲んだ。「そういうことは、合理的というのだ」と先生は言われた。「それも、せいぜいおまけをつけてあげてなんだ。——科学的というのは、学問的ということ。知識の意味じゃあないぞ。学問的というのは……」そして、認識とか体系的とか法則とか、むずかしい話になろうとしたが、すぐにお止めになった。科学的というのは学問的ということ、と先生はもう一度念を押し、五年間の女学校生活の授業のなかで、君たちには今日のこの話が恐らく一番高級だろうと言われた。そして最後には、結局ドイツが出た。「そんなこと、先生どころかドイツの女学生なら、みな知っているほどのことなのだ」と。

朝の第一時間目の始まりに、西洋史の先生は「昨夜、僕は一睡もしておりません」と上体を支えるように教卓の両わきを掴んで言われた。「丁度、今から四時間と二十分まえ……」と教室の後ろの壁の時計に眼を挙げられた。「僕は『わが闘争』を読み終えました」と急に声がかすれて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

絶句された。眼を伏せ、脣を嚙みしめ、両頬がピクピクしかける。ヒットラーのその自伝半生記が話題となって、大変読まれていることは、いつとはなしに比奈子も知っていた。「僕は亢奮してそのまま眠れなかった。自分はこういうすばらしい男と同じ時代に生きているのかと――」とまた絶句された。そうして、その日の授業は数百年も前のヨーロッパの人物たちのことではなくて、『わが闘争』の話になったのだった。

日独伊三国同盟の成立以来、イタリアとムッソリーニの名もよく出るようになった。新聞の写真やニュース映画にも、ムッソリーニが現われる。額が禿げあがり、ずんぐりした躰つきに平気で穿いた革長靴の両脚を内輪気味に踏ん張り、眩しそうに眼を細め、男の子が憤ったみたいに顎を突き出している人なのだが、比奈子は何故かちょっとムッソリーニが好きだった。彼とその国の人気は、ヒットラーとその国の人気には及ばないが……。その両国が、ヨーロッパの戦争での仲好しらしかった。そこへ、日本が仲間入りした。デパートの外壁に、「祝　日独伊三国同盟調印」と大書した長い垂幕が吊り下げられたりした。支那と戦争している日本が、遠いヨーロッパの二国の仲間入りをして、どういうよいことがあるのか、比奈子には分らないが、それ以来ドイツとヒットラーがまた一段ともてはやされているのである。

しかし、尾高家のハナさんはドイツ人との混血婦人だが、祐三が彼女を褒めるのは、三国同盟以後そうなったのでもなければ、オリンピック以来のことでさえなかったようだ。祐三は人に対して打算や思惑に動かされることが多く、それなのに好き嫌いが激しく、気持がよく変りもする。そういう性格なのに、尾高一家――結局夫妻ということになるのだが――に対しては、昔から穏やかな好もしい気持を持ち続けていたとみえる。比奈子がつくづくそう思ったのも、一再ではなかった。もう母は亡くなっていたと思うが、祐三は比奈子にこんな話もしている。

昔、尾高道太郎先生が何かの話から、あれはハナと結婚して二、三年経った時分だったが……そう前置きして、祐三に語ったことがあるという。ハナさんのいる席での話ではあるまい。――ある日、ハナさんが祖母のドイツ婦人と幼女の自分が一緒にいる写真をはじめて道太郎先生に見せた。何と書いてあるのですかと、台紙もケースもなしの粗末な古ぼけた写真の裏を見せた。彼女がドイツから日本へ連れて来られた時は満四歳にもなっておらず、その後はずっと日本人同様の過ごし方をしてきた人であることは、比奈子も聞いている。――一日の労苦は一日にて足れり　祖母はおまえに聖書のこの言葉を贈る――写真の裏に書かれたドイツ語はそれだけだった。

道太郎先生は日本語に言い替えてやりながら、眼頭が熱くなった。薄幸の孫娘の行末を思いやる無力な老婆の心情が哀れであった。いかにも不馴れな筆跡だった。それなのに、やっぱり横文字人種ならではの筆跡なのだった。それがまた、道太郎先生には一層たまらなかった。危うくなりかかる眼頭に打ち勝とうとして、彼は口を開いた。それをドイツ語のまま読んでやった。ふたたび日本語で言ってやった。

「……一日にて足れり、というのは、どういう意味でしょうね？」とハナさんが訊く。「そうだなあ、……一日が終ったら、何も彼も忘れて、くつろぎなさい、取り越し苦労はやめて、ゆっくり眠りなさい。ま、そういうことなんだろうな」と道太郎先生は答えた。ハナさんは頷き、ちょっと黙っていてから、「あなたは神さまの御心に叶っていらっしゃる」と言う。道太郎先生はびっくりした。妻がこれまで神さまと言うのは、日本で普通に言われる神さまたちのことなのだった。聖書とか、キリスト教とか、そのほうの神さまとなると、多くの日本人並みで、信仰はもとより、最低常識程度にしか知らないはずだ。いや、そういう点では全く大方の日本人並みでしかない道太郎先生でも、それくらいは知っている聖書のその言葉からして、彼女は聞くのは初めて

だった様子である。しかも、妻は幼女のうちにドイツ語はすっかり忘れてしまい、自分たちと少しも変らぬ日本語を話すのに、やはり器官の構造も自分たちとは半分ちがうのか、今でも音声が多少は鼻にかかっている。同様に、物心つくまえにキリスト教国を離れて、それまでの経験は無かったと言ってもいいはずなのに、何かの場合には、早速示唆してくるものが、体の内に伝わっているのだろうか。聖書という言葉ひとつにしても、中身については無智であろうと、日本語のその言葉、その響き、その字姿にさえ、自分たちとはちがう何かの印象を受けるのだろうか。

それにしても、自分が神さまの御心に叶っているとは、道太郎先生は考えてもみないことであった。聖書のその言葉を我流ながらに説明することができたからなのか。そうではなかった。「あなたは取り越し苦労をなさいませんもの。よく、何も生命に関わるわけじゃあるまいしと、おっしゃるでしょう」とハナさんは言うのである。道太郎先生は、恐縮した。なるほど、自分には確かにその傾向があるようだ。だが、それは自分が暢気な質だからだった。神さまの御心とかとは、関係はないのだった。しかし、ハナさんの折角のその言葉に与ってみると、彼はひとときの不思議な気持になった。彼女の祖母なる、無力な哀れな老婆が、薄幸の孫娘へ贈るものとして、聖書のその言葉を思いついたことが哀れではなくて、老婆のために何よりだった、老婆はその言葉を知っていて幸せだったと、妙に深々としたよい気持になったという。

そうして、道太郎先生のその思い出話を聞くと、思いがけないことに祐三もまた、ちょっとよい気持になったのだった。彼は特に心配事や不満があっても、道太郎先生にさえそれを聞いてもらおうとするような男ではない。だから、道太郎先生の得意らしい「何も生命に関わるわけじゃあるまいし」をその人から言われたことはなかった。ハナさんなり子供なりが言われているのを

見たこともなかった。しかし、自分の家の者――少くとも、義父だけでも、道太郎先生からその言葉に与ったことが、一度や二度はありそうだった。様々に自分を恨んでいる義父である。老いて気甲斐性も衰え、尾高夫妻に、思わず愚痴をこぼす時もあるだろう。夫妻はひと通り、上手に聞いてやるだろう。そうして、最後に道太郎先生が言う。「――だけれども、ま、相良先生。何も生命に関わることじゃありますまいし」――実際その通りなので、義父は苦笑する。祐三は自分に対する義父の感情などはどうでもよい。が、道太郎先生のその得意らしい手段で、その場だけでも苦笑くらいはできる気持になった義父を想像すると、義父に対する日頃の不快がふと途切れ、何だかよい気持がしたものだそうである。

「どう思うね？」

話してしまうと、祐三はあらためて比奈子に訊ねた。

「それは、ま、いろいろと……」

「そうだろう。おまえのような者でもね。――たとえば？」

感動した部分もあった。あとで、ゆっくり考えてみたいと思った部分もあったようだ。しかし、比奈子は、説明するのは面倒だった。思い返してみることが、まず面倒に思われた。それに、彼女の感想は結局のところ、父はつまり道太郎先生とハナさんが何となく好きなのだなあ、ということに纏まる。

「つくづく、そう思ったわ」

彼女は一言そう答えると、座を起った。――

正隆との結婚話の最初のきっかけはこうであったと、祐三は比奈子に話した。

正月、祐三は尾高家へ年始に寄った。戦争のために、年中行事や季節の遊びは年ごとに圧せられ、地味な正月だった。客もまばらにしか現われず、来ても程なく帰ってゆく。そろそろこのあたりでよいだろうと、散歩がてらに少し近くの家を廻りに出て、尾高家へも寄ったのだった。その正月、祐三はいつもとちがって、着流しで客を迎えていたのだが、ずぼらして、そのままトンビを羽織って出てきたのである。

尾高家にも、正月らしさはなかった。祐三の家でもそうだったが、縁起物は一切ない。床の間も、改まってはいなかった。道太郎先生は留守だった。

「お母さんが着替えておれば、それでみんなの代表だなんて申しましてね」

控え目ながらに装っていたハナさんが言って、傍を顧みた。正月を過ごしにきていた正隆と未婚の妹が、普段着姿で家にいた。挨拶してから、雑談した。途中で、妹が比奈子のことを少し話題にすると、「どうぞ、よろしくおっしゃってください」と言って退いた。

「そうでしたわね、今年はご卒業ですのね」

ハナさんが今しがた娘の口にしていたことを継いで言った。しかし、そういう場合よく出る「で、もうお相手は?」という言葉はなかったことだろう。祐三もまた、そういう場合によく出る「よろしい方がありましたら……」という言葉は口にしなかっただろう。

「いろいろとご指導願えれば、ありがたいところです」

と祐三は言った。

「ええ。大してお役にも立ちますまいけれど、何かの時には、どうぞご遠慮なく……」

とハナさんが言った。そして、そこで話題はふっと途切れたことであろう、と比奈子は思う。少し尾を引く途切れ方であったであろう。そのさなかに、

「比奈子さんがひとりっ子じゃあないか、僕が内科じゃあなくて外科医であれば、おもしろいのですがね」

突然、正隆が言った。

「そうお思いにならないですか?——ね、どうですか?」と正隆は祐三に言い、母に言った。応える暇も待たずに、続けた。「——比奈子さんに弟さんがおありだとか、僕がこれじゃあなくって」と聴診器を向ける手つきをし、「これであれば」と今度は見えない刃物を握って右から左から乱切りまでしてみせた。

祐三は外科医の正隆を空想し、ハナさんは弟をもった娘である比奈子を空想する。空想なので、心おきなく空想できる。それぞれにとっての空想はじつに新鮮だ。これまで考えてみたこともない想定であるからだ。祐三のほうでいうならば、ハナさんのその空想——男きょうだいをもった娘である比奈子を空想することには、既に疲れている程だったであろうけれども。そうして、ハナさんとしては、その時と同様にこれまでにも外科医の正隆を恐らく一度も空想したことはないだろう。

しかし、正隆がひとり子ならぬ比奈子を空想してみせたことは、うまいやり方だった。比奈子本人のことだけに限っていえば自分は結婚したいと、気持を示したことになるわけだった。外科医の自分を空想してみせたことは、もっとよかった。内科医でも、婿養子になれないことはない。しかし、相良外科病院をもつ相良家のことであるから、後継ぎの婿養子としてはやはり外科医でなければならないでしょう。いや、病院のほうの後継ぎは別に考えることもできるわけだ。その場合、医者とは全く別の方向の婿養子のほうがむしろよい。それが内科医などという他の分野の医者であれば、何かと納まりわるくてご迷惑になることは眼にみえています。で、自分は五男一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com